

## 東独カアル・マルクス大学の新聞学部

和田 洋一

東独には六つの総合大学があるが、その中で新聞学部をもっているのは、ライプチヒのカアル・マルクス大学だけである。

私は一九五九年九月の始め、国際見本市の機会を利用してライプチヒにはいり、同市の西端ティーク街にある新聞学部を訪問することができた。ライプチヒの町は東ベルリンとくらべると、人通りもいくらかにぎやかであるが、ティーク街のあたりは、ひっそりかんとしていて、そこに「カアル・マルクス大学新聞学部」という看板をかかげた古風な四階建ての建物があった。

夏休みで、学生がいないため、建物の内部もしくだだったが、受附へいって、日本からやってきたのだが、図書や色々の設備をみせてもらえないだろうかとなぜかすると、助手らしい青年があらわれて、私に講堂や演習室や図書室や、その他写真撮影のための設備をした部屋、ラジオの実習室などをつぎつぎみせてくれ、そのあと私のいくつかの質問にも答えてくれた。

暑中休暇だし、教授たちはどうせいないだろうと、始めからあきらめていたところ、学部長のブジスラウスキー教授が、今日は朝早くからきて、部長室で事務をとっている、せつかくだから会

東独カアル・マルクス大学の新聞学部

ってみたらどうかということで、私としては願ってもない幸이었다。しかし、前もって手紙で会見の申しこみをしてないので、と、ちよつとためらった様子をみせると、その助手らしい青年は「ジャーナリズムの世界では急襲ということは、いつもありうるし、許されることですよ」といって私を元気づけてくれ、「プロフェッショナル・ブジスラウスキーと話を機する会は中々えられないんです。彼は学問の上での国際交流で、方々の國をとびまわっていて、留守が多いんです。昨日彼はウルシャウからライプチヒに帰ってきて、今日学校に顔を出したばかりのところなんですよ」とかすかに笑いながら私に語った。

この多忙な教授兼部長を前ぶれなしに訪れて、ながく時間をとるのは礼儀でないと思ったが、話をしているうちに、つい一時間近くたってしまった。そろそろいとまごいをしようとする、教授はさいごにつきのように語った。

「日本の新聞については自分も大きな関心をもっており、もっと勉強したいと思っているが、何分日本語がよめないののでどうしようもない。しかしわれわれの新聞学部には多勢スタッフが

## 東独カアル・マルクス大学の新聞学部

て、ヨーロッパのどの国の言葉でかかれていても、誰か分る者があるから、日本の新聞にかんする研究業績を横文字にして、自分たちのところに送ってもらえたら、大変ありがたい。西欧の学界と、われわれの社会主義圏の学界とのあいだには全然連絡がないように普通考えられているが、実際はそれほどでない。アムステルダムで出ている『ガゼット』だとか西ベルリンで出ている『ブリチステイク』などの雑誌にあなたが論文をけいさいすれば、それはきつと私たちの目にとまるでしょう」

部長室を出ると、そこには先ほどの助手が私を待っていて、部長のブジラウスキー教授と副部長のトイブナア教授の横顔をうつつした大きな写真を一枚記念にといつてわたしてくれた。

以下私は、この日の見聞と、カアル・マルクス大学の要覧、東独政府の出している一九五八年度統計年鑑（一九五九年五月発行）、一九五九年四月十七、十八の両日ライブチヒで開催されたドイツ社会主義統一党中央委員会「新聞会議」議事録などをもとにして、カアル・マルクス大学新聞学部の現状を、かんとんに紹介しようと思う。

カアル・マルクス大学文学部内の新聞学科が独立して新聞学部 Fakultät für Journalismatik となったのは一九五四年で、それはモスクワ大学の言語学部の中の新聞学科が一九五二年、新聞学部にも昇格したことと、あるいは因果関係があるのかもしれない。

城戸又一氏の「社会主義国の大学新聞学科」(『新聞学評論』6 一九五七年)をよむと、モスクワ、レニングラード、北京、上

海、平壤などの大学の新聞学科もしくは新聞学部は、だいたいにおいて言語学部、言文学部の中にあるか、もしくは中から育ってきており、講義科目の編成をみても法、政、経よりはむしろ文を重んじているようにみえるが、カアル・マルクス大学の新聞学部についても、ほぼ同じことがいえる。

ドイツの大学にはもともと修業年限はなかったし、西独では今でもない。しかし東独の大学は古い伝統をすて去って、ソヴェトなりに修業年限をきめており、ただソヴェト、中国、北朝鮮の新聞学科・学部が五年であるのにたいし、カアル・マルクス大学の新聞学部の年限は四年になっている。

新聞学部の学生が新聞社の中で実習生として働いたり、若い新聞記者が大学へ送りこまれて再教育されたりというようなこと、また新聞学部の卒業生が失業どころか、ひっぱりだこの状態であること、新聞学科・学部が、始めから新聞社、通信社、雑誌社、放送局などで働くジャーナリストの養成機関として考えられているということ、こういう点は、東独をも含めて社会主義国では大體共通のようである。

カアル・マルクス大学新聞学科の学生数は、一回生八二名、二回生一〇四名、三回生五二名、四回生七四名、五回生一名、計三一名（一九五八年十二月末日の在籍数）、教員のスタッフは教授五名、専任講師三名、準専任講師八名、上級助手四名、助手十五名、計三十五名で、助手たちもそれぞれ講義もしくは実習を一つづつ担当している。そして五人の教授のうちブジラウスキー氏は「ドイツ新聞発達史」を、副部長のトイブナア氏は「新聞製

作の理論と實際」を、あとの三人は「近代文学社会学」「ロシア・ジャーナリズムの歴史」「ソヴェトの新聞と東欧人民民主主義國の歴史」を、また三人の専任講師は「文章論」「経済学基礎理論」「ドイツ文学史」をそれぞれ受けてもっている。

四年間の教科目全体を見わたすと、「弁証法的唯物論」の講義と演習、それからロシア語が一回生から四回生まで、ずっと引きつづいて課せられているのがまず目につく。

一回生には、この三つの科目以外に「資本主義経済の基礎」とその演習、「ドイツ新聞発達史の特殊問題」とそのプロゼミナール(進演習)、「ドイツ文学史」とその演習、「文章論演習」などが課せられている。

第二年目は「社会主義経済の基礎」とその演習、「ドイツ新聞発達史の特殊問題」とそのプロゼミナール、「ドイツ文学史」とその演習、「新聞製作の理論と實際」「新聞実習」「ラジオの理論と實際」「新聞実習」「ラジオの理論と實際」「ラジオ・ジャーナリズム実習」「ラジオの實際にもなる諸問題」「言語発声教育」「文章論演習」など。

第三年目は「ソヴェト新聞発達史の特殊問題」「口頭試問」「新聞製作の理論と實際」「新聞のジャンル」「ジャーナリズム実習」(必修のクラスと選択のクラスと)「報道論特別ゼミナール」「ラジオの實際にもなる諸問題」「ラジオのニュース解説、論説、報道に関する特殊ゼミナール」「言語発声教育」「新聞の實際活動にもなる諸問題」など。

第四年目は「労働運動史」「新聞製作の理論と實際」「国内政

東独カアル・マルクス大学の新聞学部

治、国際政治、農業、経済、文化」のそれぞれに関する特殊ゼミナール、「東欧人民民主主義國の新聞」「資本主義諸國の新聞の特殊問題」「ソヴェトの新聞の特殊問題」とその演習(二十世紀演劇)「美学史」などである。

全体として「新聞学原論」「新聞経営論」「広告論」「新聞法制、新聞倫理」などの科目が見当らず、「新聞発達史」と「新聞製作の理論と實際」が、他の社会主義國の新聞学科の場合と同様二本の柱となっているのが注目される。

現在東独で活躍しているジャーナリストの一〇%は、カアル・マルクス大学新聞学部の卒業生であるが、社会主義建設の過程で、新聞が集団的組織者、宣伝者としてどのような効果をあげているかを検討するときには、東独ジャーナリストの唯一の養成機関であるカアル・マルクス大学の新聞学部のあり方も、当然問題になってくる。

ドイツ社会主義統一党中央委員会が開催した第三次新聞会議で政治局員のアルベルト・ノルデンは、印刷にして九十頁に達する長文の報告をよみあげたが、その中で彼は新聞学部の現状を批判し、今後どのように改めてゆくかについて、いくつかの提案を試みている。

彼は、新聞学部を卒業した者たちが、新聞発達史を十分身に付け、論説や解説の書き方も、ある程度わかまえていことは認める。しかし彼等はしばしば実際の知識にひどく欠けており、そのため社会主義建設の過程をがっちりつかんで、単純明快、

迅速にそして鬪争的な構えで記事を書くことができない、とノルデンは主張する。そして今後は、科学的な知識と平行して、広汎な実際的な経験や処理の仕方が大学であたえられ、学生と民衆の生活との結びつきが確保されねばならない、という提案がこれにつづく。

政治局員ノルデンはまた、若い科学者たち（つまり新聞学部の助手たち）が、ジャーナリズムの実際面と社会主義的現実をたいし、今までよりもっと緊密に結びつかねばならないと主張し、彼等の中に政治問題と対決することを回避する傾向がみられるが、これは克服されねばならないものべっている。

この政治局員はさらに新聞学部の教授団に向つて次のような警告を発している。

「諸君はジャーナリズムの科学について多く語り、その承認を要求している。そのこと自身は賞讃にあたいすることであろう。たとえばドイツ新聞発達史、特にヒットラー政権以前の労働者新聞の歴史にたいする新聞学部のマルクス・レーニン主義的研究の偉大な成果を、われわれは評価することにやぶさかではない。

しかしもしも諸君がジャーナリズムの科学について語るとするならば、それは何よりも、社会主義の建設にさいしての、そして今や社会主義的変革にさいしての、われわれの新聞発行機関、放送機関の豊富な経験を普遍化すること、理論的に深めることではなければならない。諸君の兵器庫を検討してみたまえ！ 諸君は実践の武器といつしよに理論を、理論の武器といつしよに実践を装備してきたであらうか、今までのところはまだされてはいない！

だからこそ新聞学の教授たちは、現実にとりのこされてしまっているのである。」

この批判のきびしさは言うまでもない。特にドイツ新聞発達史に関する批判は、直接ブジスラウスキー教授個人に向けられているとみねばならない。

ブジスラウスキー教授は、ノルデンの報告が終つたあとの討論のさいに発言し、われわれは過去において、新聞の歴史を研究するにさいして、不当にもドイツ民主共和国（東独）の新聞の歴史を、なおざりにしてきた、と自己批判をおこない、われわれは今後われわれの歴史研究を現代にまで延長し、そうすることによつて実践に一層有効であるよう努力したいとのべた。この発言が政治局員ノルデンを満足させたかどうかは不明である。

ノルデンはまた、新聞学部に入學の手つづきをとつたのち、その学生が二年間は新聞社の編集局で働き、通信によつて大学の教育を受け、新聞社内での実習を通して、いつかどのジャーナリストたりうるものが証明された場合は、彼の知識を十全なものにするため、大学にきて直接教授の指導を受けながらさらに二年間勉強する。これが合目的な方法ではないかと思う、という提案をしているが、これにたいしては副部長のトイブナア教授が次のように答えている。

「三年間は新聞社で実習をしながら通信教育を受け、二年ないし三年間は、大学で直接教えを受ける、というやり方が、私たちがいいと思つている。しかし実習の期間を、始めにおいた方がいいか、まん中においた方がいいか、あるいは最後にした方がいい

かについては、私たちはまだ討論をつくしていないので、今日提案することはさしひかえたい。」

七年ぶりで開かれたこの会議は新聞会議 Presskonferenz とよばれているけれども、ラジオ、テレビが除外されているわけでは決していない。ノルデンなど、報告の中でテレビを大いに重要視し、今まで芝居やオペラを見たことのない地方農村の住民が、テレビを通して始めて立派な文化に接するようになったこと、都会と農村の差がテレビによって一部解消したことなどを指摘し、今後われわれのテレビ番組の質を一段と向上させて、西独の労働者をこちらへひきつけるようにしなければならぬものべっている。

ノルデンの示した数字によれば、東独のテレビ受信機の数は、一九五七年十二月は一五五、〇〇〇台であったのが、一九五九年

四月には三四〇、〇〇〇台にふえた。一九六一年には悠々百万をこえるであろうということである。(序でながら東独の人口は千七百三十五万で、日本の人口の五分の一にもたりない)

そしてカアル・マルクス大学の新聞学部も、最初は「新聞発達史」「新聞製作の理論と実際」「ラジオ」の三部門(三研究室)から成り立っていたのが、新たに写真部門がふえ、一九六〇年には、いよいよテレビ部門が増設されるということである。

私が新聞学部を訪ねたとき、若い助手の人は、「われわれの新聞学部は次第に大きくなってゆくが、新聞学部の建物は、もっとも大きくなってくれない」といつて笑ったが、東独の社会主義建設がどんどん進めば、建物の問題など、かんたんに解決されることであろう。